

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



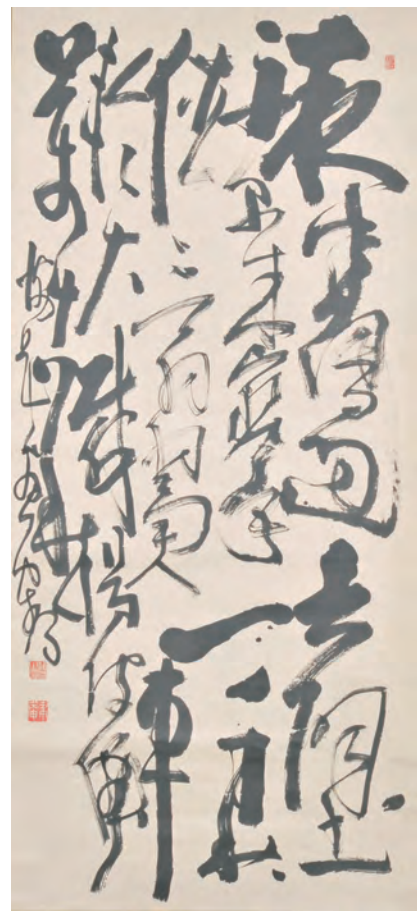
No.49

自由奔放な人 その人の名は頼聿庵！！

下の二つの書幅を見比べてください。左側の文字はどっしりと堂々とした書体で書かれていますが、もう一方は文字だか記号なんだか・・・何が書かれているかわかりません。でも、この二つの書幅は同じ人が書いたものなんです。その人の名は、「頼聿庵」。江戸時代を代表する歴史家で書家でもある頼山陽の息子（長男）です。実はこの聿庵は、広島城と関係の深い人物でもあるのですが、彼の人物像をその行跡とともに見ていきたいと思えます。

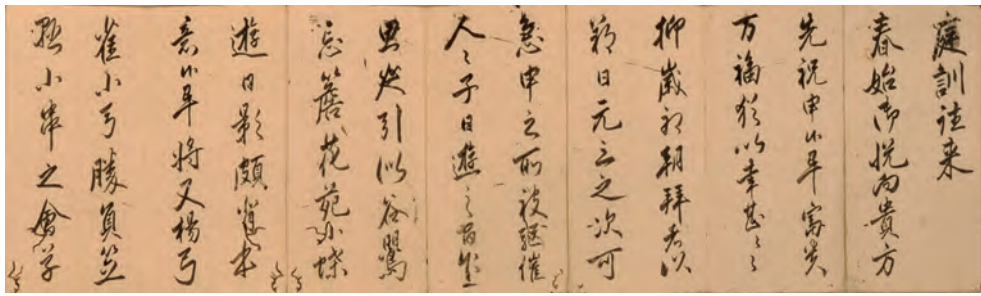


左の資料「鴻漸」は、中国の古典「易経」に由来する言葉です。「鴻」は飛べば千里をゆくおとり、「漸」は進むということで、仕官し、位がしだいに昇進していくことを意味しています。右の資料は、「夜半曾過赤壁舟 爾来寥寂一千秋 休言羽翼車輪大 載得坡仙萬斛愁」と書かれたもので、11世紀の中国北宋の詩人で書家である蘇軾（蘇東坡）が作った



「赤壁賦」について詠んだ詩です。

それでは、頼聿庵の生い立ちなどを見ていきましょう。聿庵は、江戸時代後期の享和元年（1801）2月20日に生まれ、「都具雄」と命名されました。この時父山陽は、前年に脱藩を図り、それが失敗したことによって広島



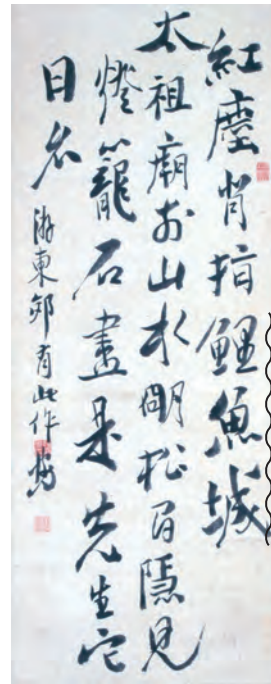
「庭訓往来」(部分)
 広島県立歴史博物館
 (頼山陽史跡資料館) 提供

されてしまっていました。このため、聿庵は祖父である春水・梅颯の子として育てられるという、特殊な境遇に置かれることになりました。

教育に関しては学者で後に三次町奉行にもなった大叔父(春水の弟)の頼杏坪が中心となって行い、英才教育が施されました。上の資料の「庭訓往来」は、聿庵が筆写したものです。「庭訓往来」とは年間各月の手紙文を集めたもので、これを書写すると社会生活に必要な語彙が習得することができるというものです。今でいう教科書のようなものですね。杏坪達の厳しい指導のもと、丁寧な書体で書かれているのがよくわかる資料です。こうした結果、聿庵は頼家の跡取りとして藩学問所に出仕するようになり、書は祖父や父の書法を勉強して書家としても有名になったのです。その書は父をしのぐとまで言われた程で、他藩の藩主が彼の書を欲しがり、その謝礼に大絹二枚が贈られたほどです。

ところで聿庵は、以前「しろや! 広島城 No.15」でも少し触れていたのですが、広島城の別称である「鯉城」を使用した現在確認できる一番古い人物ということで、広島城と関係の深い人物なのです。右の資料「遊東郊」がそうです。制作年はわかりませんが、彼が広島城郊外で遊んだ際に、二葉山から見た広島城の風景と饒津神社の境内の様子を詠んだ詩です。この中で「鯉魚城」という言葉が使われているのです。さらに、彼は鯉(魚)城に対する思い入れがかなり強かったようで、自ら「鯉城儼史」や「三十六鱗魚城退士」と鯉にちなんだ号を名乗ったりもしました。ちなみに「三十六鱗」というのは、「鯉」のことを指す言葉です。

著名な書家として活躍していたのですが、父山陽の死を境に酒の量が増え、それとともに



「遊東郊」
 広島県立歴史博物館
 (頼山陽史跡資料館) 提供

に書にも変化が出てきました。酒の力がそうさせているのかどうかわかりませんが、自由奔放?な書体へと大きく変わり、資料によっては文字として判別が難しいものまであるのです。しかし、酔いながら書いた時のこと、筆の墨が紙の上に点々と滴り落ちていたのに、文字の一部分となって違和感のない作品に仕上がったので、最初から計算して書いたのではと、周りの人達が驚いたというエピソードが残されています。こうしてみると、前ページ右側の自由奔放な彼の書は、前衛書道に通じるところがあるかもしれません。みなさんはどちらの聿庵の書がお好きですか?

嘉永三年(1849)、広島藩主浅野齐肃の御前講の席で、聿庵は藩の重臣今中大学を罵倒したことにより謹慎処分を受けてしまいました。処分を受けると彼は、自らを「迂娛軒」と号するようになりました。これは広島弁の「動けん(=動けない)」に通じており、自分の境遇を自虐的に表現しています。そしてその翌年、家督を譲って隠居し、安政三年(1856)にこの世を去りました。(山脇一幸)

かつて大坂 中之島に巖島神社の鳥居があった！

(現 大阪市北区中之島4丁目)



◁写真

「広島藩大坂蔵屋敷」の船入風景
「船入」の中央右寄りに、鳥居が浮かぶ。

左奥には、「蛸(たこ)の松」と呼ばれる名木があり、お隣の久留米藩と広島藩の境界付近の土手に植えてあった。確かに、蛸が泳いでいるかのような枝ぶりで目を奪われる。

広島藩蔵屋敷再現模型↓

大阪歴史博物館蔵

蔵屋敷は北側(模型左上奥)に「船入」、南側に「御殿」が位置し、その周囲に蔵が並び、屋敷の外周に「長屋」があった。

上の写真は、江戸時代、大坂中之島の堂島川沿いにあった広島藩大坂蔵屋敷内の「船入(川から屋敷内に水路を引き入れ、直接船が出入り可能な施設)」の様子です。幕末から明治時代初期に撮影されたと思われます。

この時代、各藩は収穫した米や特産物を、天下の台所＝大坂に集め、全国へと売りさばっていました。蔵屋敷には、米などを納める蔵の他に御殿や役所などがありました。特に広島藩蔵屋敷は、「船入」を持つ大規模なものでした。

広島藩蔵屋敷は、元和6年(1620)に完成しました。「大坂中ノ島御屋敷絵図」【広島市立中央図書館 浅野文庫蔵】、「芸州大坂御屋敷全図」【大阪商業大学 商業史博物館 佐古文庫蔵】、そして発掘調査によってその全容が判明しています。あわせて、寄贈されたこの写真により、船入付近の建造物のかたち、その装飾などが詳細に確認できました。

それでは、写真を細かく見ていきましょう。各藩は蔵屋敷に、国元より勸請した神様を祀っていたようです。広島藩は、写真の鳥居でおわかりになるでしょうが、宮島の巖島神社と三鬼堂、さらに稲荷社を祀っていました。

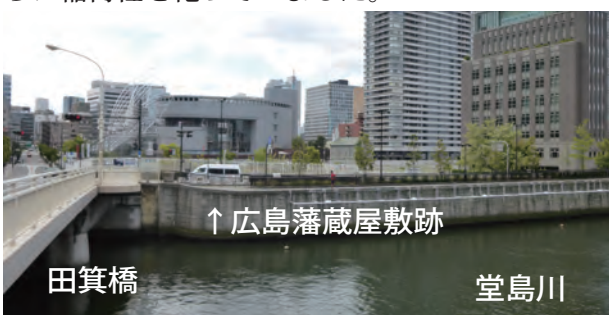


左側、石灯籠が続く参道の通路から、釣灯籠で飾られた廻廊を渡ると、わかりづらいですが巖島神社の社殿があります。その目の前には石灯籠、その先には、船入を海と見立てて鳥居が建っています。まさに宮島の巖島神社の境内を切り取った風景が大坂にあったのです。さらに注目点は、現存する他藩の蔵屋敷の写真は屋外からなのに対し、屋敷内で撮影されていることです。この風景が本当に良い景観だったのでしょう。

また、鳥居中央部を拡大して見ると、扁額に「巖嶋大明神」とあります。巖島神社大鳥居の海側の扁額にも7代目までは「巖嶋大明神」とありました。しかし、明治8年(1875)の8代目再建の際には、「巖嶋神社」に変わりました。これは明治政府の、神仏分離政策(神社から仏教要素を排除)に起因し、平安時代以来の神仏習合の形態が徐々に消されたためです。

この広島藩の蔵屋敷も、明治4年(1871)の廃藩置県に伴い、広島県の出張所になった後、この地での役目を終えることとなりました。

(山縣紀子)



↑ 広島藩蔵屋敷跡

田箕橋

堂島川

広島藩大坂蔵屋敷付近の現在



広島城園芸部活動



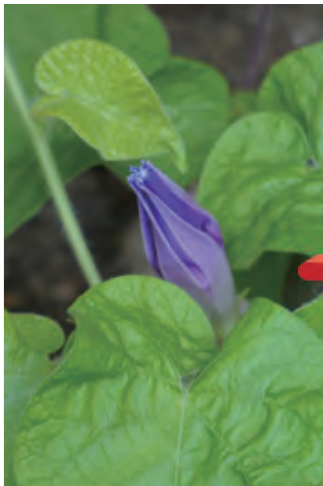
広島城学芸員のお仕事は多岐にわたっています。もちろん、展示の企画準備、講座、資料の調査研究などがメインではありますが、普段は何でも屋さんです。ガラスケース拭き、電球交換、ミュージアムショップ店員（リップサービスは大事）、観光案内、グルメ案内。さらには園芸部活動。

広島城天守の前には猫の額ほどの「庭」があり、そこでの園芸部活動というものがあります。ただし、部員はひとり。お客様へのサービスの一環として細々活動しています。この夏、クチナシがたくさん花を咲かせ、その香りが世界のお客様を楽しませてくれました。今は朝顔が育っています。暑すぎるせいか、やや軟弱なツルなのですが、それでも毎朝かわいい花を咲かせています。

朝顔が日本に伝えられたのは奈良時代とも平安時代ともいわれていますが、元々は種を薬用として持ち帰ったようです。短時間でしぼんでしまう花の儚さが日本人の気質にドンピシャだったので、いつしか金魚と並び「日本の夏。朝顔の夏。」が欠かせないものとなりました。庶民にも手軽に育てることができることから、江戸時代には広く親しまれるようになり、後期には葉も花もバラエティーにとんだ変化朝顔が大流行します。変化朝顔とは、早い話が突然変異の産物です。変化の度合いはエスカレートし、とても朝顔とは思えないようなものも生まれました。どんな花が咲くか、咲いてみないとわからない、まさに一期一会の世界が好まれたのかもしれない。

広島城の朝顔も変化朝顔です。葉は丸く表面がケバケバしています。花はやや小ぶりで桔梗を思わせる形から桔梗咲、または星咲と呼ばれます。名前をつけるなら「青丸葉藤紫覆輪星咲」（葉は濃い緑色で丸く花は藤紫色に白い縁取りの星っぽい形）といったところでしょうか。

来年もっと咲かせよう！！と言いたいところなのですが、種をまいても変化朝顔が咲くとは限りません。ひと夏の出会いを大切にします。 (岡野孝子)



しろや!
広島城

編集・発行
公益財団法人広島市文化財団
広島城
〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519
平成28年9月12日発行

広島城利用案内
開館時間：9：00～18：00
（12月～2月は9：00～17：00）
入館の受付は閉館の30分前まで
入館料：大人370円（280円） 中学生以下無料
高校生相当・シニア（65歳以上）180円（100円）
（ ）内は30名以上の団体料金
休館日：12月29日～12月31日（臨時休館あり）
ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>